正倉院藏王勃詩序校証（下）

道　坂　昭　廣

本稿は正倉院蔵王勃詩序に録される 41 作品のうち、中国にも伝わる 20 篇をとりあげ、中国諸本との異同について考察しようとするものである。前半 10 作品については「正倉院藏《王勃詩序》校注（上）」（『敦煌寫本研究年報』第十三號　2019 年 3 月。http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~takata/NIANBAO_13.pdf）と題して発表した（以下、前稿と称する）。本稿は残り 10 作品について考察を行う。

前稿と同じく、本稿も正倉院本と中国諸本の異同のうち、王勃の他の作品や過去、同時代の使用例から、正倉院本の文字であった可能性について追求しようとする。このような目的であるので、正倉院本の明らかな誤写と考えられるものは取り上げない。前稿では「校注」としていたが、作業内容から「校証」と題名を変更する。校勘には主に蔣清翊『王子安集注』（光緒七年呉縣蔣氏雙唐碑館刊本。1977 年台湾大化書局影印）を用いた。その他の中国刊本については、前稿序文を参照いただきたい。

前稿と同じく、王勃詩序作品名の前の漢数字は正倉院本に筆写されている順序を示す。取り上げた各句の前のアラビア数字は正倉院本各作品の行を示している。また考察の対象となる文字は文中では「」で示した。《》は書名、作品名は〈〉、引用文は「」で示す。王勃の作品名の後に付す巻數は、蔣清翊《王子安集注》の巻數である。

二十六秋日登洪府滕王閣餞別序

本作品については、以前検討したことがある（「王勃「滕王閣序」中の「勃三尺微命、一介書生」句の解釈」、「正倉院蔵『王勃詩序』中の「秋日登洪府滕王閣餞別序」」、共に『『王勃集』と王勃文學研究』（研文出版　二〇一六年）所収）ので、今回は省略する。

二十七赴劼太學序

本作品についても、以前幾つかの部分について検討したことがあり（「テキストとしての正倉

院蔵『王勃詩序』」（前掲拙著所収））、その部分は省略する。

3　名存寶爽

中国諸本は「華存實爽」とする。正倉院本の「寶」は「實」の誤字であろう。第一字、正倉院本の「名」であっても中国諸本の「華」であっても、「實」との対照であるので、解釈はあまり異ならない。ところで、王勃には家族や一族について言及する作品が幾つかある。その中に、一族全体の不遇について言及する〈倬彼我系〉（巻三）という四言詩がある。その最後の部分に、虢州参軍である自分のことを「名存實爽、負信愆義」と表現している句がある。この序と創作時期も近く、正倉院本の文字であった可能性は高いと思われる。

13 雖獲一階、履半級、數何足恃哉。

正倉院本の「獲」を中国諸本は「上」に作る。この部分も解釈は異ならない。また正倉院本の「數」が、中国諸本にない。解釈に大きな違いがあるわけではないが、「數」があれば、否定を強調することになるであろう。

22-23 不有居者、誰展色養之心、不有行者、孰振揚名之業。

四句目「振」を中国諸本は「就」に作る。名を揚げる學問（業）に「就」くというのが中国諸本の文字であるが、この序が太學に向かう弟を励ますということを考えると、学問の道に奮い立てという「振」も、間違いとは言えないように思う。

二十八秋夜於綿州羣官席別薛昇華序

6 不可多得也、今並集此矣。

「多」を中国諸本は「雙」に作る。文字の類似によって正倉院本が誤写した可能性もある。正倉院本であれば､「多くを得ることはできない」。中国諸本であれば「二つを得ることはできない」と、解釈に違いが生じる。孔融〈薦禰衡表〉（《文選》巻三十七）に「帝室皇后、必畜非常之寶、若衡等輩、不可多得」。また《論衡》（巻十三超奇篇）にも「譬珠玉不可多得、以其珍也」とある。一方で蔣清翊がこの部分に注を附さないように、「不可雙得」の句は、基づく典拠を俄に見つけることができない。この句は、「今之群公並受奇彩、各杖異氣、或江海其量、或林泉其識、或簪裾其跡、或雲漢其志」と宴席の参加者のそれぞれの才能を数え上げたあとに続き、それらを総括する二句である。このように考えると正倉院本「多」が適切なように思われる。

8 人生百年、逝如一瞬。

中国諸本は「人之百年、猶如一瞬」とする。どちらも人の一生があっという間であるということを言い、解釈に大きな違いは生じない。ただ「人之百年」は用例が見つけられないが、「人生

百年」は《列子》周穆王編、費昶〈行路難其二〉（《玉臺新詠》巻九）に「君不見、人生百年如流電」と、ここで言うことを一句にまとめた表現がある。また〈三月上巳祓禊序〉（巻七。但し王勃の作品ではない）、そして駱賓王〈答員半千書〉（《駱臨海集箋注》巻八。以下《箋注》）にも「夫人生百年、物理千變」とある。少なくとも正倉院本の文字であった可能性がある。

11 義有四海之重、而無同方之戚、交有一面之深、而非累葉之契。

中国諸本は二句目「戚」の字を「感」に作り、三句目「交」を「分」に作る。どちらも字形の類似により異同が生じた可能性がある。しかし「感」と「戚」はやや意味が異なる。「戚」であれば、陸機〈演連珠五十首其三〇〉（《文選》巻五十五）「是以天殊其數、雖同方不能分其感、理塞其通、則並質不能共其休」が、典拠となる。宴席に参加する人々が、薛昇華と王勃を除き、多くが官僚であったことが、この表現を生んだのではないか。故に友情はあるが、同じ役割の悲しみは共有できないというのではないだろうか。ちなみに、日中文化交流史研究会編《正倉院本王勃詩序訳注》（翰林書房　二〇一四年。以下《訳注》）は「戚」字について、特に注を附さないが、「血のつながりのある者同士ほど志や行いが同じということはなく」がこの句の解釈と思われ、「戚」を親戚の意味で解しておられるようであるが、憂いの意味で解する方がよいのではないかと思われる。第三句「交」と「分」であるが、王勃には「一面」を「新交」と組み合わせた表現が幾つかあり、正倉院本交であれば、この宴席の人々とは、初めて知り合って深い友情を結んだと解することが可能であろうが、「分」であれば、対応する「義」とあわせてもやや解釈が難しいように思われる。また典拠としては、袁宏〈三國名臣序贊〉（《文選》巻四十七）「披草求君。定交一面」を挙げることが出来る。

13 他鄉秋而白露寒、故人去而青山斷。

中国諸本は「秋」を「怨」に作る。この対句の直前に「是月秋也、于時夕也」と秋の文字があり、正倉院本だと短い間隔で「秋」の字が現れることになる。第二句の「去」との対応を考えると「怨」の方が適切に思われる。ただ「秋」と「怨」は字形が類似するとは言えず、正倉院本の誤写とも考えにくい。正倉院本と中国諸本の文字の異同のなかには、中国において伝写の間に表現や文字が整斉されていったように思われる場合があった。ここも或いはそのような時代による推敲が行われたのかもしれない。

二十九宇文德陽宅秋夜山亭宴序

2-3 亦有依山臨水、長想巨源、秋風明月、每思玄度。

「依」を中国諸本は「登」に作る。王勃の〈深灣夜宿〉詩の自注に「主人依山帶江」とあり、「依山」という言葉はある。蔣清翊はこの二句に対して《楚辭》九辯「登山臨水兮送將歸」と《世説新語》賞譽篇「裴令公目見山巨源、如登山臨下、幽然深遠」を指摘する。これを典拠とすれば、「依」

は「登」との字形の類似による正倉院本の誤写と思われる。

三句目「秋風明月」の句、王勃は他に〈寒夜懐友二首其二〉（巻三）や〈上絳州上官司馬書〉（巻五）で用いている。だが中国諸本は「明月清風」に作る。この句もまた〈秋日游蓮池序〉巻六「朗月清風之俊人」の句に対して蔣清翊が指摘するように、《世説新語》言語篇「劉尹云、清風朗月、輙思玄度」を意識し、中国諸本の文字がよい。しかしこの詩序の題に「秋夜」とあり、正倉院本の文字であったものが、《世説新語》の知識をもつ伝写者によって書き換えられた可能性もあるように思われる。

3-4 未有能星馳一介、留興緒於芳亭。

「興緒」を中国諸本は「美迹（跡）」に作る。「興緒」は王勃〈上巳浮江宴韻得遙字〉詩（巻三）に「上巳年光促、中川興緒遙」とあるが、蔣清翊は注を付さない。「美迹」は、この句以外使用例はない。蔣清翊はこの語について、江淹〈傷愛子賦〉（《廣弘明集》巻二十九下）「遯高行之美迹、弘盛業之清猷」を引く。「興緒」は王勃より後の時代、杜甫〈奉和嚴中丞西城晚眺十韻〉（《箋注》巻十二）「征南多興緒、事業闇相親」の例がある。正倉院本であれば「夜道を急ぐ独行の使者（旅人）は、自分の興趣を美しい亭に残すことはなかった」、中国諸本では「美しい行い（功績）」となり、作品の解釈が異なる。

8-9 或三秋舊契、闢林院而開襟、或一面新交、敘風雲而倒屣。

「舊契」を、中国諸本は「意契」に作る。どちらの語も王勃以前に使用例はあまり多くない。そのなかで《魏書》巻五十二段承根傳に「（段）承根贈（李）寶詩曰……自余幽淪、眷參舊契」とある。蔣清翊は注を附さないが、「意契」も《南齊書》巻二十五張敬兒傳「太祖出頓新亭、報（沈）攸之書曰……張之奉國、忠亮有本、情之見與、意契不貳邪」とある。正倉院本に従えば、古くからの友人の意で解することができる。中国諸本であれば、古くからの思いといった解釈になる。「新交」との対であることを考えると正倉院本「舊契」がよいのではないだろうか。

10 彭澤陶潛之菊、影泛仙罇、河陽潘岳之花、光懸妙札。

中国諸本のうち項本は、四句目「懸」を正倉院と同じ文字に作るが、他本は「縣」に作る。ただ対応するのが「泛」であるので、ここは「縣」であっても、正倉院本「懸」と同じく動詞で解することが適切と思われる。また「札」を中国諸本はすべて「理」に作る（《文苑英華》は「理（疑）」とする）。「妙札」は徐陵〈玉臺新詠序〉（《文苑英華》巻七一二）「三臺妙札、亦龍伸蠖屈之書、五色花牋、皆河北膠東之紙」とあるが、他のテキストすべて「妙迹」に作る。「妙理」について蔣清翊は、《文苑英華》の（疑）を指摘したうえで、班固〈漢武内傳〉を引く。「妙理」の解しがたさを示しているようだ。この部分、傅増湘《文苑英華校記》（北京図書出版社　二〇〇六年。以下、《校記》）によると、「礼」に作るテキストがあったとする。「禮」でも難解であるが、「礼」と「札」は字形が類似し、正倉院本の「札」の文字の可能性を示す。「罇」（中国諸本は「樽」に

作る）との対応から考えても「理」より「札」という具体的な物である方が良いように思われる。「札」であった場合、花の輝きが美しい短冊に記され、枝に懸けられたと解せるのではないか。

12 禺同金碧、蹔照詞場、巴漢英靈、俄潛翰苑。

中国諸本は四句目を「潛光翰院」とする。二句目「蹔」との対応から考えると、正倉院本の「俄」の方がよいように思われる。ただ、「光翰院」は、于志寧〈大唐故太子右庶子銀青光祿大夫國子祭酒上護軍曲阜憲公孔公碑銘〉（《金石粹編》巻四十七）「學富石渠、……詞光翰苑」という句がある。正倉院本であれば、蜀地の優れた人々がこの宴席に集まり、しばらく詩宴の場を照らし、突如この文學の場に集まっていると解釈できる。中国諸本であれば、人知れず文學の場を輝かせるといった解釈になる。

13-14 風高而林野秋、露下而江山静。

中国諸本は「金風高而林野動、玉露下而江山清」。それぞれの句に一字を加えて形を整える（但し《文苑英華》は玉ではなく、秋に作る）。「金風」と「玉露」の対は、謝朓にあり、中国諸本の対句が整っている。しかし、王勃〈為人與蜀城父老書一〉（巻六）と「天高而林野疏、候肅而江山靜」と秋の風景を描写する似た表現がある。

15 魚鱗積磴、還昇菌樓之峯、鴈翼分橋、卽暎芙蓉之水。

「菌樓」を中国諸本は「蘭桂」に、「鴈翼」を「鴛翼」に作る。蘭桂は《楚辭》以來よく用いられる言葉である。しかし正倉院本「菌樓」の語も劉孝綽〈春宵〉詩（《藝文類聚》巻二十二人部十六閨情）に「月帶園樓影、風飄花樹香」という例がある。三句目「鴛翼」について蔣清翊は、「鴛翼、謂橋形似之、未詳所用」とする。「鴈翼」は王績〈遊山寺〉（《王無功集》巻三）「鴈翼金橋轉、魚鱗石道迴」という類似した対句がある。また庾信に陣形の譬喩として「雁翼」の語がある。一方「鴛翼」は駱賓王〈櫂歌行〉（《箋注》巻二）に「鳳媒羞自託、鴛翼恨難窮」という言葉があるが、愛情に関わる表現である。蔣清翊が予想するように橋の形を指すと考えられるので、正倉院本の文字であった可能性が高い。

19-20 中牟馴雉、猶嬰觸網之悲、單父歌魚、罕悟忘筌之迹。

四句目を中国諸本は、「罕繼鳴琴之趣」とする。蔣清翊は第三句について「歌、疑訛字」と疑問を呈する。單父と魚の関わりについては、蔣清翊が指摘するように《呂氏春秋》を典拠とする。單父の県令となった宓子賤は、王勃の作品に何例か登場するが、皆絃歌の故事を典拠とする。「忘筌」は《莊子》外物篇「荃者所以在魚、得魚而忘荃」を典拠とする。王勃は一例しか用例がないが、駱賓王をはじめ、王勃と同時代文学者によって使用される典拠である。対応する句も中牟県令の魯恭の故事を用いつつ、二句目はそのような雉も、網にかかる悲しみがあるというのであるから、小魚をとらなかった単父県でも、漁具が放棄されたことを知る魚はいないと解すれば、対

句としての意味的な繋がりを認めることができる。

20-21 兼而美者其在茲乎。人賦一言、俱裁八韻。

この3句は、中国諸本にない。〈梓州玄武縣福會寺碑〉（巻十九）「兼其美者、著（全唐文作蓋）在我柳君乎」という句がある。また、〈續書序〉（巻九）「喟然曰、宣尼既沒、文不在茲乎」とあるように、《論語》子罕を意識した表現であると思われ、この句の表現に無理はない。またこの作品の内容から考えても「中牟」「單父」の対句を総括する「兼而美者其在茲乎」は、後半の作詩の条件を言う句とともに、当初は存在した句であったと考えられる。

三十晩秋遊武擔山寺序

8 瑶泉玉甃、尚控銀江、寶剎香壇、猶分鋭闕。

中国諸本は「瑶泉」を「瑶臺」とする。「泉」と「臺」は字形が類似する。この句を構成する「玉甃」を王勃は〈梓州飛烏縣白鶴寺碑〉（巻十六）で「遂使悲生棄井、堙玉甃於三泉」と用いており、蔣清翊は「《説文》甃、井壁也」と指摘する。このような意味であれば、「臺」より「泉」の方が良いように思われる。一方「銀江」を諸本「霞宮」に作る。「霞宮」は蔣清翊が言うように《真誥》にある（他に《漢武内傳》）。これに対し、「銀江」はあまり使用例を見ない。しかし〈乾元殿頌〉巻十四に「少海控銀河之色」という句があり、「銀江」が「銀河」と同義であるなら、武擔山の滝が銀河より来るという、この山の高さをいう可能性がある。四句目「分鋭闕」を中国諸本は「芬仙闕」に作る。しかし傅増湘《校記》には、「芬」を「分」に作るテキストがあったと指摘する。「鋭闕」という言葉はにわかに用例をみつけられないので、誤字の可能性があるものの、これも武擔山と、そこにある寺院が高所にあることを表現しているのではないか。

9-10 琱瓏、陜疑夢渚之雲、壁題相暉、殿寫長門之月。

この4句、對句とすると正倉院本に脱字があると思われる。一句二句目を中国諸本は「琱櫳接映、臺凝夢渚之雲」に作る。正倉院本に脱字とともに誤写の可能性がある。

15 曽軒瞰迴、齊万物於三休、綺席乗虚、窮九該於一息。

「曽」を中国諸本は「層」とする。正倉院本では意味が取りにくく、字形の類似による正倉院本の誤写であろう。「瞰迴」を中国諸本は「迴霧（《文苑英華》は霧を霞に作る）」に作る。また対句を構成する第三句も「乗虚」を諸本「乗雲」とする。霧と雲であるから中国諸本がよいように思われる。しかし、「瞰迴」は謝朓〈和蕭中庶直石頭〉（《謝宣城集》巻四）「君子奉神略、瞰迴馮重峭」とあり、《唐詩紀事》巻三上官昭容に載る〈長寧公主流杯池七言三首其三〉にも「憑高瞰迴足怡心、菌閣桃源不暇尋」とある。他に顔師古〈等慈寺塔記銘〉（《金石萃編》巻四十二）「綺疏瞰迴、繡閣臨空」等の例を見つけることができる。また「乗虚」も何晏〈景福殿賦〉（《文選》

巻十一）に「岧嶤岑立、崔嵬巒居、飛閣干雲、浮階乗虚」という例がある。このように正倉院本の文字に根拠があり、また「何層にも積み上げられた高い軒から遥かを眺め」、「美しい席は空に浮いているように高い」とこの文字で矛盾無く解釈することが可能でもある。

16-17 石兕長江、河洲在目。

二句目「河」を中国諸本は「汀」に作る。この二字は字形が似る。「汀洲」は王勃の他の作品でも用いられる。しかし「河洲」も王勃〈上巳浮江宴序〉巻七「出河洲而極睇」とあり、蔣清翊は《詩經》周南・關雎「在河之洲」を指摘する。正倉院本の文字であった可能性がある。

三十一新都縣楊軋嘉池亭夜宴序

中国諸本はこの詩序を〈越州秋日宴山亭序〉（巻六）と題する。蔣清翊が本詩序中の「況乎揚子雲之故地、巖壑依然」の句の注で「詳玩此句、似題首越州、應作益州」と言うように、この作品は蜀で作られたと思われる。新都県は蜀にあった県名であり、正倉院本の題名が本来の文字であったと判断される。

7-8 紅蘭翠菊、俯暎沙亭、黛柏蒼松、環臨玉嶼。

第四句を中国諸本は「深環玉砌」に作る。「玉砌」は王勃の他の作品でも用いられる。これに対し「玉嶼」の使用例はあまり多くない。ただ、「紅蘭翠菊、俯映沙（中国諸本作砂）亭、黛伯蒼松」に続く句であり、「深く環る」より、「環りて臨む」の方が対として適切なように思われる。また水辺の宴席であることを考慮すると、少なくとも正倉院本の文字でも解釈が可能である。

三十三遊廟山序

中国諸本は〈遊山廟序〉（巻七）に作る。その場合、普通名詞、つまり或る山に存在する廟を指すことになり、場所が特定されない。「廟山」であれば、山の名前と考えられる。この詩序の題名の異同について、羅振玉は《王子安集佚文》の序で、正倉院本の題名が正しいと指摘する。羅振玉が言うように、王勃には他に〈遊廟山賦〉（巻一）がある。その序に「玄武山西有廟山、東有道君廟。蓋幽人之別府也」とあり、その描写も本作品と通じる。この詩序の題名は「廟山」であった可能性が高い。

2 常覧仙経、博渉道記。

「覧」を、中国諸本は「學」に作る。しかし蔡邕〈貞節先生范史雲碑〉（《蔡中郎集》巻二）「渉五經、覽書傳」の他、袁宏〈三國名臣序贊〉（《文選》巻四十七）「余以暇日、常覽國志」、また戴逵〈與遠法師書〉（《廣弘明集》巻十八）「常覽經典」など“常覧＋書物”の例があるが、“常學＋

書物 ” はすぐには例を見つけられない。

6 常恐運従風火、身非金石。

「従」を中国諸本「促」に作る。この二字は字形が類似する。「風火」について、蔣清翊は潘岳〈河陽縣作其一〉(《文選》巻二十六)「人生天地間、百歳孰能要。頴如槁石火、瞥若截道飆」を引く。王勃がこの詩を意識しているとすると、風や火に促されるではなく、風や火のような一瞬と同じであるという解になる「従」の方がよいように思う。なお王勃は〈彭州九隴縣龍懐寺碑〉巻十九でも「玉燭沈浮、風火兆流形之蘖」と「風火」を使っている。蔣清翊は、《法苑珠林》一「〈立世阿毗曇論〉云一切器世界起作已成時、二種界起長、謂地火兩界。風界起吹、火界蒸錬。地界風界恒起吹一切物、使成堅實。既堅實已、一切諸實種類、皆得顕現。如是多時、六十小刼究竟已度」。《禮記》孔子間居「地載神氣、神氣風霆。風霆流形、庶物露生、無非教也」を引く。ここからも、風火とともに時間に流されてゆくという解釈になる「従」であった可能性を主張できる。

6-7 遂令林壑道喪、烟霞版蕩。

「道」を中国諸本は「交」とする。〈與員四等宴序〉(巻七)「林壑遂喪、煙霞少對」と類似する句がある。また、同時の作、同じ場で作られたと考えられる〈遊廟山賦〉巻一にも「林壑逢地、煙霞失時」という句がある。このように「林壑」は二つの概念ではないので、「交」(それぞれ)という言葉は適切でないように思われる。一方、正倉院本「道喪」について王勃は〈廣州寶荘嚴寺舍利塔碑〉(巻十八)「然則聖人以運否而生、神機以道(道字據頃本補)喪而顕」とあり、蔣清翊は《荘子》外篇繕性「由是觀之、世喪道矣、道喪世矣。世與道交相喪也」を典拠として指摘する。この句は当初「道喪」であったものが、「世與道交相喪也」が意識されて、伝写のうちに「交」に書き換えられた可能性があるのではないだろうか。

9 玄武西之廟山、蓋蜀郡之靈峯也。

「西之廟山」を中国諸本は、「玄武西山廟」とし、「蜀郡之靈峯」を「蜀郡三靈峰」に作る。中国諸本はそれぞれ「之」を取り、対句としても整う。ただ題名の部分で述べたように、本詩序は「廟山」で作られたと考えられる。〈遊廟山賦并序〉(巻一)でも「玄武山西有廟山、東有道君廟」とある。また「山」であれば、下の句の「靈峰」とも対応する。中国諸本の「三靈峰」については、蔣清翊は沈黙し、現段階では蜀の三靈峰がどの山を指すのか、私も見つけられない。

10 俯臨万仞、平視千里。

「千里」を中国諸本は「重玄」に作る。「重玄」は蔣清翊が注するように空のことであり、「俯けば深い谷、視線は空と同じ高さ」という解釈になる。正倉院本であれば、千里の彼方まで直視するというという解釈になる。ともにこの場が大変高いということを表現する。しかし「万仞」との対として考えた場合、「千里」の方がよいように思う。なお《晉書》巻十二天文中志二「凡

候氣之法……平視則千里、擧目望卽五百里」という表現がある。

14 王孫可以不歸、羽人可以長往。

この２句の「可以」を中国諸本は「何以」に作る。「可」と「何」は字形が類似する。傅増湘《校記》は、二句目を「羽人可以長往」とする古鈔本が存在したと指摘する。中国諸本の「何以」であれば、「王孫はどうして帰らないのだ、羽人はどうして去ってしまったのだ（帰ってこないのだ）」という疑問となる。一方正倉院本に従えば、「王孫は帰らないであろう、羽人も去ってしまったであろう」と解される。中国諸本と正倉院本の文字の違いは、どこに「不歸」なのか、どこから「長往」するのかという場所の解釈に違いが生じるのではないか。蔣清翊が指摘するように前の句は、劉安〈招隱士〉（《文選》巻三十二）「王孫遊兮不歸」に基づく。後の句は《楚辭》遠遊「仍羽人於丹丘兮、留不死之舊鄉」と、潘岳〈西征賦〉（《文選》巻十）「悟山潛之逸士、卓長往而不反」（李）善曰、「班固〈漢書贊〉曰、山林之士、往而不能反」を典拠とする。〈招隱士〉は、俗世を離れ、山中に隠棲してしまった王孫を呼び返そうとする作品である。「羽人」の句も同様である。この典拠に従って解釈するならば、この二句は俗世界にいた王孫や羽人が山沢にいることが意識されている。つまり王孫が帰る場所は人間世界であり、羽人が人間世界から「長往」したのである。そうであれば正倉院本のこの対句は、廟山の仙界のような自然を見れば、王孫や羽人は「俗世」に帰らない、また戻らないだろうという解釈になる。一方中国諸本であれば、「山廟」のあるこの地を出発点とすることになるのではないだろうか。このような美しい自然を捨てて、どこへ行ってしまったのかと解することになる。どちらの文字でも、この山を褒めていることに違いはない。正倉院本であれば、「仙人（隠者）が滞在したのも理解できる」となり、中国諸本であれば、「仙人（隠者）はなぜこの場を去ったのだろうか」となるよう思われる。

三十四秋晩入洛於畢公宅別道王宴序

3-4 早師周孔、偶愛神宗、晩讀老莊、重諧真性。

中国諸本は「早師周禮、偶愛儒宗」に作る。「孔」と「礼」は、字体の類似によって異同が生じた可能性がある。しかし現存する王勃の作品には他に「周禮」という語彙を用いた例はない。一方で〈四分律宗記序〉（巻九）には「以堯舜為塵勞、以周孔為桎梏」と、「周孔」の用例がある。

「愛神」を中国諸本は「愛儒」とするが、《文苑英華》は儒字に「一作神」と注し、正倉院に作るテキストが存在したことを示す。《尚書》大禹謨「正月朔旦受命于神宗」を典拠とし、陸倕〈石闕銘〉（《文選》巻五十六）「昔在舜格文祖、禹至神宗」などの使用例がある。一方、「儒宗」も用例のある言葉であるが、具体的な人物より儒家的博識、学術のリーダーを指す。第四句「重」を中国諸本は「動」に作る。どちらについても適切な用例を見つけることはできないが、対応する第二句第一字が「偶」なので、「重」「動」とも副詞的に「かさねて」、あるいは「ややもすれば」と読むのであろう。この部分は正倉院本に従えば、若い時期には周公や孔子を学んで、たまたま

堯帝を敬愛したが、晩年に老子荘子を読み、重ねて（ややもすると）本当の性質に適った」となる（なお《訳注》が、「朝には……、たまたま神を信仰し、夕べには……、謹んで更に真の道理の諧調につとめた」と訳すことには従いがたい。但し語注ではそれぞれ「若い時から」「年とってから」とされている）。

6-7 野客披荷、塹辞幽磵、山人賣薬、忽至神州。

「野客」は諸本「野老」に作る。それほど大きな違いは生じないが、王勃には〈贈李十四四首其一〉（巻三）「野客思茅宇、山人愛竹林」という対句がある。また〈夏日登龍門樓寓望序〉（巻六）にも「野客之荷衣、入幽人之桂坐」とある。しかし〈彭州九隴縣龍懐寺碑〉（巻十九）に「山人自狎、野老相逢」という対句がある。庾信〈擬詠懐二十七首其十六〉（《集注》巻三）に「野老披荷葉、家童掃栗跗」という句があり、ここは直接にはこの表現を意識しているのかもしれない。

9 郊情獨放、已厭人間、野性時馴、少留都下。

「郊」は諸本「交」に作る。「郊情」はあまり用例がなく、正倉院本の誤写が疑われる。しかし三句目「馴」を中国諸本が「違」と作ることについては、《文苑英華》が「違（一作馴）」としており、正倉院本の文字に作るテキストがかつて中国に存在したと推測できる。「規範を嫌う性格」が時には社会に馴れてと解するか、「規範を嫌う性格」も時にはその性格を抑えてと解するか、少し解釈を異にする。

17 重扃向術、似元礼之龍門、甲弟分衢、有當時之驛騎。

第一句「重」を諸本は「高」に作る。〈益州德陽縣善寂寺碑〉（巻十七）に「重扃霧敞、複殿雲深」とあるほか、楊炯、宋之問の作品にもこの語がある。一方「高扃」は、他の文学者には使用例があるものの、王勃にはない。どちらも高官・貴族の豪邸を意味する言葉で、解釈に大きな違いは生じない。第三句「分衢」を諸本「臨衢」に作る。これも解釈に大きな違いはない。第一句の「向術」との対応を考えると、甲第が通りに面している「臨」とする中国諸本の文字の方がよいように思える。しかし、第四句が鄭当時の駅騎を典拠とするので、梁簡文帝〈三日侍宴林光殿曲水詩〉（《藝文類聚》巻四歳時中・三月三日）「挾苑連金陣、分衢度羽林」。沈君攸〈羽觴飛上苑〉（《古詩紀》巻一〇三梁三十）「隔樹銀鞍喧寶馬、分衢玉軸動香車」のような例から考えると、邸宅のある道路を騎馬が道を分けて駆けるという表現であった可能性もあるのではないか。

21 泉石縱横、雄筆壯詞、烟霞狼藉。既而神融象外、宴液寰中。

「狼藉」を中国諸本は「照灼」に作る。「照灼」は〈廣州寶莊嚴寺舍利塔碑〉（巻十八）に「玉林照灼」という例がある。中国諸本は「照り映える」の意であり正倉院本の「自在に散乱する」と意味が異なる。「神融」を諸本は「神馳」に作る。また「宴液」を諸本は「宴洽」に作る。〈九成宮頌〉（巻十三）に「恩霑下帛、宴液仙宮」という対句がある。蔣清翊は上の句に対して「下

帛未詳、或下席之訛」と注するだけでなく、「宴液」について「液似洽字之訛」とする。正倉院本も基づいたテキストの段階で既に「洽」は「液」に誤られていたのかもしれない。この字が「洽」であったとすると王勃には〈山亭思友人序〉（巻九）「興洽神清」や〈聖泉宴詩〉（巻三）「興洽林塘晩」とあり、さらに陳子昂〈忠州江亭喜重遇吴叅見牛司蒼序〉（《陳伯玉集》巻七）にも「丹藤緑篠、俯映長筵、翠渚洪瀾、交流合座、神融興洽」という王勃の対句を一句にまとめた句がある。蔣清翊が「宴、疑冥字之訛」と推測していることから考えると、或いは「宴」もまた字形の似る「興」字であったのではないかという想像が起こる。

23 鶏鶋始望、未及牲牢、麋鹿長懐、敢忘林藪。

二句目「未」を中国諸本は「不」に作る。どちらも否定を意味する文字で、解釈に大きな違いは生じない。大鳥がやってきたばかりのときは、御馳走を望まないというこの２句は、蔣清翊が指摘するように《國語》魯語を典拠とする。ゆえに意志的な否定を示す「不」より、今のところはそこまでに及ばないという「未」の方がよいように思われる。また、蔣清翊が「始望」の典拠としてあげる陸機〈謝平原内史表〉（《文選》巻三十七）は「臣之始望、尚未至是」と、「未」を用いる。第三句の「敢」を中国諸本は「非」に作る。捕らえられた麋鹿は、たとえ御馳走が並べられても、棲んでいた「長林」の草を食べようとする。蔣清翊は、嵇康〈與山巨源絶交書〉（《文選》巻四十三）を典拠として指摘する。正倉院本の「敢」であれば「忘れるだろうか」と反語に読むのかも知れないが、林藪を忘れたのではないという中国諸本「非」の方が、解釈が容易であるように思われる。

28-29 策藜杖而非遙、整紫車而有日。

二句目「整」を中国諸本は「勅」に、「紫」を「柴」に作る。紫と柴は字形が似る。柴車であれば、粗末な車を言う。一方、「紫車」の用例は多くないが、例えば劉孝威〈半渡溪〉（《古詩紀》巻九十八梁二十五）「入營陳御蓋、還家乗紫車。皇恩知已重、丹心恨不紓」とある。「藜杖」とともに、宮仕えを終え、皇帝の優待をうけて、故郷に隠棲することをイメージする。ここでは「柴車」より「紫車」の方が適切であるように思われる。「整」と「勅」は指すところが異なるが《文苑英華》には「勅（一作整）」とある。また二句目の「而」を中国諸本が「之」に作るが、これについては正倉院本であっても問題はない。

33 追赤松而内及、泛黄菊而相従。

「追」を中国諸本は「尋」に作る。王勃より以前に、「追赤松」はあまり用例がないが、魏徵〈唐故邢國公李密墓誌銘〉（《文苑英華》巻九四八）に「心辭魏闕之下、志在江湖之上、慕范蠡之高蹈、追赤松之遠遊」という句がある。王勃より後の李泌〈奉和聖製重陽賜會聊示所懐〉（《唐詩紀事》巻二十七）にも「未追赤松子、且泛黄菊英」という例があるが、李泌は或いは王勃のこの句を意識しているのかもしれない。中国諸本の「尋赤松」も見つけられない。「追」は赤松子の事績を

追うということであろうが、「尋」であれば、赤松子のいる場所を訪問するという意味になる。解釈に少し違いが生じる。「内及」を中国諸本は、「見及」に作る。この二字は字形が似る。正倉院本の誤写と思われる。なお二句目「而」を中国諸本は「以」に作る。

34-35 庶公子之来遊、幸王孫之必至。

第二句の「必」を中国諸本は「畢」に作る。「必」と「畢」は発音が同じである。正倉院本と中国諸本の異同には、字形の類似を原因とするものの他、発音が同じであることによって生じたと考えられる場合がある。この異同も解釈が異なるが、どちらが当初の文字であったかはわからない。

36-37 唯恐一丘風月、侶山水而窮年、三径蓬蒿、待公卿而未日。

「窮」を中国諸本は「忘」に作る。〈守歳序〉（巻七）には「玉律窮年」という句がある。年を終えてしまうという「窮年」のほうが、時間を忘れるの「忘年」より、この部分では適切なように思われる。また「而未日」を中国諸本は「之來日」に作る。「未日」は江總〈太保蕭公謝儀同表〉（《藝文類聚》巻四十七職官部三・儀同）「目送白雲、拜承明而未日」とあり、日程が決まっていないという意味に解することができる。

35 別盧主薄（諸本作簿）序

1 林慮盧主薄、清士也。達乎藝、明乎道。

中国諸本は「盧」字を欠く。〈送盧主簿〉詩（巻三）があるが、《文苑英華》は〈送林慮盧主簿〉に作る。このことから考えると、正倉院本が当初の文字であった可能性が高い。また二句目「清士」を中国諸本は「清靈士」に作る。「清士」は《史記》伯夷傳の他、《世説新語》賞譽篇に桓彝が徐寧を「眞海岱清士」と推薦したとある。「清靈」という言葉は多くの例があるが、「清靈士」は使用例を見つけられない。この部分も正倉院本が当初の文字を伝えていると思われる。

7 同徳比義、目擊道存。

中国諸本は一句目を「同徳此義」とする。蔣清翊は「疑是同德比義之訛」と指摘し《後漢書》孔融傳を引く。この部分は正倉院本が正しい文字であり、中国では伝写の間に書き誤られたのであろう。

36 秋日楚州郝司戸宅遇餞霍使君序

中国諸本は「霍」を「崔」に作る。人の姓であり判断はつかないが、《文苑英華》は「霍（一作崔）」とするので、正倉院本の誤写とは断言できない。

8-9 欽霍公之盛徳、果遇攀輪、慕郝氏之高風、還逢解榻。

「欽霍」を中国諸本は「飲崔」に作る。「霍」と「崔」の異同は、正倉院本、中国諸本ともに題名と一致し、判断ができない。しかし「欽」と「飲」の異同はどうだろうか。この二字は字体が似るが、傅増湘《校記》によると舊抄本は「飲」を「欽」に作ると記録している。蔡邕〈陳太丘碑〉（《蔡中郎集》巻二）「欽盛徳之休明、懿鍾鼎之碩義」、また、王勃より後の時期であるが、顔眞卿〈博陵崔孝公宅陋室銘記〉（《顔魯公文集》巻五）に「某夙仰名教實、欽孝公之盛徳、晩聯臺閣、竊慕中丞之象賢」と、王勃の句と類似する句がある。正倉院本の「欽」が当初の文字であった可能性がある。

12-14 青蘋布葉、乱荷芰而動秋風、朱草垂榮、離芝蘭而涵暁液。

「離芝蘭」の「離」を中国諸本は「雑」に作る。字形が似るうえに、どちらの文字でも解釈は可能であるが、「乱」との対句であるので中国諸本の「雑」の方が適切である。「暁液」は諸本「晩液」に作る。どちらもあまり用いられる言葉ではない。恐らく宴席の時間を示していたと思われる。判断はつかないが、「暁液」は李嶠の他、駱賓王〈秋露〉詩（《箋注》巻二）「變霜凝暁液、承月委圓輝」と、秋の露の言葉として王勃の同時代に用いる例がある。

21-22 嗟乎、此驩難再、殷勤北海之莚、相見何時、惆悵南溟之路。

「莚」は蔣本のみが「樽」に作り、他本は「筵」に作る。正倉院本の文字に根拠がある。

22-23 請揚文律、共兆良遊。人賦一言、俱成四韻、云尓。

「文律」を中国諸本は「文筆」に作る。〈入蜀紀行詩序〉（巻七）に「爰成文律、用宣行唱」とある。楊炯〈王勃集序〉にも「動揺文律」とある。一方で「文筆」は、王勃に使用例はない。二句目「兆」を中国諸本は「記」に作っており、これは正倉院本の字体の類似による誤写と考えられる。

37 江寧縣白下驛吴少府見餞序

中国諸本に「縣白下驛」の四字がない。同時の作品かは不明であるが、王勃に〈白下驛餞唐少府〉詩（巻三）がある。この二つの地名について、蔣清翊は《元和郡縣志》の同じ部分を引く。即ち巻二十六「江南道一、潤州管、上元縣（緊、東北至州一百八十里）……（武徳）九年改為白下縣、屬潤州。貞觀九年又改白下為江寧」である。さらに白下縣について、蔣清翊は「李白〈金陵白下亭留別詩〉（《李太白詩集注》巻十五）「驛亭三楊樹、正當白下門」。（楊齊賢曰、白下亭在今建康東門外）」という。王勃の時期に既に白下は江寧県下にあったと思われ、正倉院本の四字は当初よりあった可能性が高い。宴の行われた場所を言っているのだ。「見餞」を諸本は「宅餞宴」とする。「見餞」という語は王勃の他の作品には見えない。しかし彼よりやや後の張九齢に〈送

賓校書見餞得雲中辨江樹〉詩（《文苑英華》巻二八七）がある。餞されると、受け身に解するのであれば、王勃が送別される主賓となる。作品の内容から考えると王勃の南方への旅の途中と思われ「見餞」がよい。

2-3 蔣山南指、長洲北派。五（諸本作伍）胥用而三吳盛、孫權因而九州裂。

「指」を中国諸本は「望」に作る。ここではあまり大きな解釈の違いは生じない。また「長洲北派」を中国諸本は「長江北流」とする。長江は江寧縣の北を流れるので「長江北流」は理屈にあう。一方「長洲」の語は〈秋日登洪府勝滕王閣餞別序〉巻八に「訪風景於崇阿、臨帝子之長洲」とあり、蔣清翊は枚乘〈上書重諫吳王〉（《文選》巻三十九）「不如長洲之苑」。李善注、服虔曰、吳苑也。韋昭曰、長洲在吳東也」をひく。この庭園であれば、北ではない。しかし王粲《登樓賦》（《文選》巻十一）に「挾清漳之通浦兮、倚曲沮之長洲」とあるように川の中州を言うのであれば、正倉院本の文字で解釈することが出来る。

三句目「因」を中国諸本は「困」に作る。「孫權因」であれば、孫權がここを根拠とし、中国は分裂したと解することができる。「困」とすると、孫權がここに逼塞することによって中国は分裂したと解すことになる。

3-4 遺墟舊壤、百万戸之王城、武據龍盤、三百年之帝國。

二句目は、「百萬戸」は中国諸本に異同があり、《文苑英華》・蔣本は「百」、張本項本は「數」に作る。但し「戸」は中国諸本ともに「里」、「王城」は「皇城」に作る。李白〈王屋山人魏萬〉詩（《李太白集》巻十四）に「金陵百萬戸、六代帝王都」のように、金陵を「百万戸」と称する例はあるが、「百万里」は王勃の前後でも見つけられない。

「武」を中国諸本は「虎」に作る。「虎」は、唐朝の避諱字であり、「獸」などが代わりに用いられる。欠筆した「虎」の文字を正倉院本が「武」と書き誤ったのではないか。「武（虎）據（踞）龍盤（蟠）」は、庾信〈哀江南賦〉（《集注》巻二）にある。

4-5 關連石塞、地實金陵。覇氣盡而江山空、皇風清而市朝一。

「關」を中国諸本「闕」に作る。どちらも建築物であり、あまり大きな意味の違いはない。傅増湘《校記》は、舊抄本に「關」と作るものがあったと指摘しており、正倉院が基づいたテキストの存在が明らかになる。四句目「一」を中国諸本が「改」とするのは、天下が統一されたことをいうのか、金陵の変化を指すのか、解釈が異なるように思われるが、適切な典拠を指摘できない。蔣清翊も「市朝改」に対して典拠を指摘しない。

6-7 昔時地險、為建鄴之雄都、今日天平、即江寧之小邑。

二句目「為」を中国諸本「嘗為」とし、四句目も「即」を「即是」と一字を加える。正倉院本であっても、解釈は可能である。三句目「天平」を、中国諸本は「太平」に作る。王勃の叔父王

績〈登壠坂二首其一〉（《王無功集》巻三）に「地險關山密、天平鴻鴈稀」という対句がある。「地」との対応から考えれば、「天」が適切であると思われる。

8-9 梁伯鸞之遠逝、自有長謡、閔仲叔之遐征、欣逢厚礼。

四句目「欣」は、中国諸本に異同があり、蔣本と《文苑英華》は「欲」、張本項本は「仍」に作る。正倉院本の文字については、駱賓王〈鏤雞子〉（《箋注》巻二）に「幸遇清明節、欣逢舊練人」という使用例がある。

13-14 想衣冠於舊國、更値三秋、憶風景於新亭、俄傷万古。

張本は、更字以下十八字を欠く。またその他の中国諸本は「更」を「便」に作るが、王勃〈春思賦〉（巻一）「復有西墉春霧寡、更値南津春望寫」とあり、王績にも〈秋夜喜遇姚處士義〉（《集》巻二）「相逢秋月満、更値夜螢飛」という句がある。

14 情槃興冷、樂極悲来。

「情槃」を中国諸本は「情窮」とする。先にみた〈秋日楚州郝司戸宅遇餞霍（崔）使君序〉に「情盤樂極、曰暮途遙」とある。他に〈上巳浮江讌（宴）序〉にも「情盤興遽」とある（但し中国諸本は、「遊盤興遠」巻七に作る）。一方「情窮」は現存する王勃の作品には使用例がなく、蔣清翊もこの語に対して典拠を指摘しない。正倉院本に作る根拠があると主張することができる。

18-19 請開文囿、共寫憂源。人賦一言、俱題四韻云尓。

「共寫憂源」を中国諸本は「共瀉詞源」に作る。范雲〈州名詩〉（《藝文類聚》巻五十六雑文部二・詩）「徐步遵廣隰、冀以寫憂源」とある。一方「瀉詞源」は、王勃以前に使用例を見つけられない。「瀉詞源」であれば、自分たちの文学的能力を注ぎ込んだ作品を作ろうという、高揚した雰囲気を示す。正倉院本の「憂源」であれば、心にある悲しみ苦しみを書き上げようという呼びかけに解することが出来る。この作品は、王勃が南方へ向かう途上の作品であったと考えられる。「見餞」という題名も含め、正倉院本の文字の方が、王勃のこの時の立場と心情が反映されている。